

# 文化高知

'93年9月 NO.55



「鉄塔の多い風景」 織田信生

(財)高知市文化振興事業団

# 土佐の二代目おかみ

横山香代子

生まれ育ちも土佐の私の職業は、宿のおかみである。

おかみとは、着物姿の立ち居振る舞い、洗練された物腰の柔らかさでお客様のお迎え、お見送りのあいさつだけの優雅な一面の世界では決してない。

ひと昔前は、「細うで繁盛記」、最近ではNHKの『おんなは度胸』などのテレビで「宿のおかみ」という私どもの職業にスポットが当てられる時代になったけれど、全国に八万軒余りといわれるほどの旅館・ホテルのおかみも同じであるが、四六時中神経の休まることなく時間と体力の戦いみたいな毎日の中で、遠来より御越しいただく旅人に、少しでも多く土佐の風土、風味、人情味を分かっていたら、限りある時間の中で一生懸命におもてなしをさせていただくのである。

ゆえに、「宿とおかみ」とは個々のおかみの個性がその宿の個性につ

ながっていると考えても、決して言い過ぎではないと思われる。

旅とは心ある人との出会いの楽しさ、素晴らしい職業に恵まれた私でもあに及ばぬ自然の美しさとの出会いの妙でありましょう。

その旅のお手伝いが出るという素晴らしい職業に恵まれた私でもあり、まさに天職である。

おかみの条件を、三つ挙げるとしたら、

- (一)声が大きいこと(健康であること)
- (二)太い心(物に動じぬ心)
- (三)繊細な心(細かい神経)

心身ともに健康であるなら、女性のみな生まれながらにしておかみの条件を備えており、ただ専業主婦になるか、職業婦人になるかの選択だけで、家庭の主婦もみな、おかみさんである。

私の場合は、創業者である母のおかみが亡くなり二代目を継いで二年余、引き継ぐ仕事の大きさと責任の

中で、慌ただしかった今日までを支えてくれたのは友人であり社員、そして旅人であるお客様である。どちらも人と人。まことに人と人とのふれあいを通じて真なるもの、善なるものを知るものである。

一期一会(ワンチャンス・ワンハピネス)、出会いの素晴らしさ、その幸せ。

働くのは自分だが、働かせてくれるのはお客様である。母の時代とは、また世の中も移り変わり、私どもの宿の在り方にもお客様のニーズの変化の中で、おかみはその時代の流れを把握し、高望みはせず、かといって現状に満足せずその宿にとって伝統的に価値あるものを守りながら、いつも向上心を持って前へ向かって進むことが要請されていると思う。

高知を訪れてくださる旅人の為、いま自分に出来るのは温かな思いやりの心と親切な心のおもてなしだと思われる。それには、お客様に喜ばれることのみを考えて、自分をも磨かねばならない日々の努力である。有り難いことに、わがふる里高知は多くの魅力を持った所である。

大自然がまだまだ残り、海、山の豊かな恵み、郷土色あふれる料理、美味しい地酒、温かな人情、他県に決して引けを取らない恵まれた環境

で我々は暮らし、また旅人をお迎え出来る。しかし恵まれすぎているがゆえに、昔から伝わる文化、歴史がおおる良い面に気づいてない所もあるようだ。旅人は日常の生活の忙しさから解放され、「ゆとり」「やすらぎ」を求めてこの土地にいらつしやる。高知に行けばふれられる、高知にしかないものは、県民一緒に守っていかねばならないと思う。点在している今の観光名所を一つ大きなものにし、半日あれば「土佐」を感じてもらえる「村」を。豊富な海の幸の市場が毎日開催される所などがあれば、きっと高知の旅を堪能されるだろう。



朝のラウンジでコーヒを味わいながら朝刊に目を通すひと、昨夜の宴会を楽しそうに話すひと、龍馬のふる里に来ることの出来た喜びを表すひと、初めて口にした皿鉢料理の感激を語るひと。

今朝もそんなひとときの中で「良かったよ、また来るね」のひと言に幸せを感じます。

(株)土佐御苑代表取締役社長)

# この道はいつか来た道

木村 名美

四年経ったら帰ってくる……。旅立ちまでの数日間、幼友達とことさし語り合うこともなく、育った町の山河をゆっくりと眺めることもせず、目前に迫った新しい生活だけ頭に描いていた。海を二つ越えて北海道にやってくるからもうすぐ二十年。大

学を終えたら戻るはずだった高知は生活の実感のない「ふるさと」になってしまった。四季の移り変わりを日常のなかで感ずることは、もう出来な。とはいえ、私にとって高知はすぐに帰ることの出来る身近な「ふるさと」である。生活してない者の身勝手さで、帰省の度、故郷の風景に変わらないものを探す。未知への憧れが心の大半を占めていた世代を過ぎ、自分の生きていた過去を確かめたがる世代に私もなりかけている。

この夏、初めてサハリンを訪れた。

私は、旧ソ連を中心としたユーラシア諸国の人々との草の根の友好運動を目指すボランティア団体で、事務局の仕事をしている。北海道では地理的な関係もあって旧ソ連の人々との交流が盛んだ。樺太にゆかりのある方も多い。私の属する協会は毎年友好親善旅行も企画していて、墓参を目的とする「サハリンの旅」もその一つ。ツアーに添乗してのサハリン訪問だった。

ツアー参加者の中に、中学と女学校の同窓会を開くというグループがあった。五十年という長い時間を隔てた遠い「ふるさと」。同窓生たちにとって、故郷の時間は心のなかで止まったままだったかもしれない。各人が目的の町を巡って最後の日、青春時代を過ごしたユージン・サハリンスク(旧豊原)で旧交を温め合った同窓生たちは、同窓会のと

ツアア全体の現地の人も招いた交流祝賀会でも、それぞれの思いを言葉や歌に託して披露した。懐かしい自然も、旧友たちも皆温かく迎えてくれた。でも自分が根を張って生きていくのは別の土地である。思い出の世界と現実の世界の接点をどこに見出そうかという戸惑いもあったにちがいない。しかし「ふるさと」は今の自分と昔の自分を切り離すと同時に、過去と現代の橋渡しもしてくれ

る。いい意味で「ふるさと」は過去の自分に出会える所だ。自分の意志で故郷を離れたわけではない人達の「ふるさと」についての思いは、私のそれとは異なるかもしれない。それでも「ふるさと」という言葉が、思い出の中にある大切な人々や自分自身を包んでくれていることに変わりはない。

サハリンには未だに「ふるさと」



を自分に取り戻せないでいる人が、故郷の言葉と、苦い過去の言葉と、ロシア語の三つを使って生きている。私にとって個々人の歴史だけではなく、国家の歴史も振り返らずにはいられない「友好の旅」だった。サハリンでの最後の夜、交流祝賀会での女学校同窓生の合唱、「この道はいつか来た道……」には、たくさんの思いが込められていたような気がする。

孫が「ふるさと」を離れる時、汽車と連絡船を乗り継ぐ旅路に同行してくれた母方の祖父は、今年初め亡くなった。亡くなってからしばらく、思い出すのは幼かった頃の自分を連れて鮎釣りをしてくれた祖父の姿や、縁側にくつろいで座る祖父の姿だった。亡くなった肉親との思い出は、自分の幼い頃と重なり合うものだとしたら、きっと母は応召で軍港に向かう父親とそれを見送る母親、不安な思いでついてゆく自分自身と妹とを思い出したに違いない。「この道は……」を歌った同窓生たちも私の母と同世代である。思い出にも幸せの大きさの違いがあるのだろう。子供たちには「ふるさと」を幸せな思い出とともに振り返らせてやりたいと思う。

(日本ユーラシア協会札幌支部常任理事)

# 高知市に市民ギャラリーを

大平 武夫

去る七月四日、高知文化ホールで、「高知市民ギャラリーをつくる会」の結成大会を開いた。

会場には関係者や一般市民など約二〇〇名が参加、これからの取り組みを話し合った。

高知市民ギャラリーとは、市民のわれわれが自分たちの手で作った作品を陳列する回廊で、市民のより多くの方に親しみ育んでいただくことを主眼とするものである。

高知市の文化施設の中で、作品展示可能な小施設は数カ所あるが、他の貸画廊に比べ利用度が低調に思える。その活用の改善の必要はないだろうか。

いま市内では貸画廊が増える傾向で、個展などの作品発表にはこと欠かない。しかし一〇〇人内外の中規模展のできるギャラリーは皆無である。

いままでこれらの中規模展は県立

郷土文化会館で行われてきたが、「近代文学館」に転用されることとなり閉鎖に近い。

藤並の森に再び芸術の花が返り咲くことはなく一抹の淋しさを感じるわけだが、「高知市民ギャラリーをつくる会」では、中規模展のできる市民ギャラリーの実現をめざして運動をすすめることとなった。

この市民ギャラリー運動を提唱した背景には、「なんごく・こうち地方拠点都市地域指定」「盛んになった市民の創作活動」「美術館に対する県市民の関心のたかまり」「全国的な趨勢」などがある。

高知市の都市計画も徐々に進んでいるようで、このギャラリー計画が「後の祭り」にならないようにとの気遣いもこめられている。

市民ギャラリーの基本構想としては、高知市の文化施設にこの回廊を併設するというもので、独立した美

術館にくらべ建築や運営面で格段の省力となる。

設立準備の段階では各方面から積極的に指導助言をいただいていたが、「高知駅を中心とした都市計画の中で」「新しい文化センターができる」とすればその中へ」「空洞化する生徒減の学校の活用」「わんぱくこうちの公園や動物園の隣地に体育館様式で」等々である。これからも市民サイドからアイデアを沢山出していただき市政に反映させたいと思う。

いま全国的に市や町に美術館ができ住民の糧となり生きる希望となつていくが、本市でも創作のよるこびを求め市民、特に高齢者が激増し、身辺で便利な場所へのギャラリー設置が望まれている。

何十年か経てば都市構造も大きく変わるだろうが、この種の文化施設を身近にという願いは「人情そのもの」で、決して高知市の未来図をそこなうものではない。こうした意味から「市民ギャラリーの設置」は、郷土文化会館や新設の県立美術館とかわりなく、市独自の文化の底上げとして考えてもらいたい。

今後の活動では、市民に広くこのことを理解していただき、運動の輪をひろげ出来るだけ早い時期に「高知市民ギャラリー」が実現できるよ



○ 頑張りたいと思う。

余談になるが、七月上旬までNHKで放映された金曜時代劇「清左衛門残日録」にはいつも感動させられた。仲代達矢の扮する隠居した老武士の「いきさま」のみごとさに、自分のこれからの老後を重ねて見た。

私も残された八十までの十年間を健康で「絵に没頭」したいと思う。そして若い人達の「足手まとい」にならないでこの運動を進めたいと願っている。

(高知市民ギャラリーをつくる会会長)

## 『越境の倫理学 —異質なものととも生きる方法—』(上)

今福 龍太氏講演から

昨年アメリカに行った時に感じたのは、アメリカ人の姿が以前に比べて随分多様になってきたことである。周知のように、アメリカは移民によって成立したのであって、様々な人種の人々が混在している国である。その意味から、アメリカ人というのがはじめから存在していて、アメリカ人として生まれるというよりも、どこからかやってきてアメリカで生活していくうちにアメリカ人になっていく、といった方が適切なものかもしれない。これは、我々日本人が生まれながらにして日本人だと考えていることとは好対象をなしている。アメリカで生活をしていると、「おまえはいつ亡命してきたんだ」と聞かれたり、ほとんどの人が私のことを東洋系のアメリカ人であると思っ接してくる。こうした人々との接触の中で、「自分が日本人であるというのはどういうことなのだろう」という疑問が湧いてきた。「自分が自分であって他人ではない」ということは、我々日本人にとってはごく当り前のことのようにだが、いざ自分が亡命者や東洋系アメリカ人として扱われるとなると、自分自身の存在がいろいろなものに見えてくる。自分がいまいる領域に入っていくという不思議な感覚を味わうようになってきたのである。



自分は自分であって、他人ではないという「主体意識」は、これまで「人種」「土地」「言葉」の三つの指標で確保されていた。自分が何人種で、どこに住んでいて、何語を喋っているか、という点から「主体意識」は確立されたのである。ところがアメリカでは、人種は黒人でアメリカに住み、スペイン語を喋るといふように、三つがばらばらであいま

ると、この移動の社会を実感できる場所がある。それは乗り換えのための待合所「トランジット・ラウンジ」である。そこには様々な国から成田を経由して別の国へ行くこととしているいろいろな人種の入り混じった世界がある。人種が混交しているという意味では、アメリカは国全体がトランジット・ラウンジのようなものであるといえるし、アメリカに限らず、現代社会全体がトランジット・ラウンジ化しつつあるといえる。このように多くの移動によって人々が混ざり合った社会では、人種とか言語とかといった帰属意識を問いかけていけばどんどん共通性がなくなっていく。我々は、そうした帰属意識を問いかけていくのではなく、自分の旅の物語をそれぞれが持っているという意識の中に共通性を見いだす態度が必要なのではないか。人は一人ひとり自分の人生を旅してきた。そこにはいろいろな物語があるはずである。いろいろな旅の経験を持った人達がある時何かの拍子で関わり、共通の意識を持った者が集まり、そこに共同体が立ち上がる。これからの社会は、人種や言葉の共通性を探すといった態度からではなく、お互いが違うのだという点を認め合う態度から成り立つ社会なのである。

# 有縁千里来相会

鮑遠清



私はよく友人と一緒に県内の観光名所に出掛けたり、お父さん（招待してくれた日本人、私は父親のように尊敬している）と一緒に日曜市に買い物に行ったりする。行くたび見た縁に覆われた青山、清らかに流れる小川、瑞瑞しい野菜と果物、全て中国の安徽省を思い出させる。高知は、その風土にしても、その人情にしてもあまりにも私の故郷と似ているからである。

高知を初めて知ったのは五年前、大学卒業寸前の六月であった。その数年前から高知にいるお父さんが中国人青年一人を家庭に招待し、博士課程を終了するまで家族と同じように暮らし、いわゆるホームステイさしたいということを高知県日中友好協会に頼んだ。そして高知県日中友好協会はそのことを安徽省科学技術委員会に話し、私と高知との出会いのきっかけとなった。それから一年が経ち、平成元年夏になって、私はついに両親と別れ、故郷を離れ、高知に来て、お父さんの新しい家族の一員となり、それまでと全く異なる生活が始まった。世界はあんなに広く、人口も五十数億いる。日本でも五十近くの都道府県があり、一億二千万余の人間が住ん

でいるのに、私は高知にきて、お父さんと会うのがやはり不思議であり、縁のほかにはなにもないではないかと、常に思われてしまう。

高知に着いた日の晩に、お父さんが自ら海から釣ってきた新鮮な魚でごちそうしてくれた。私はあまりにもおいしくて魚の頭まで食べてしまった。お父さんはそれを見て、魚が好きだと思ってくれて嬉しかった。しかし、頭まで食べてしまったらゴロウくん（ワンちゃん）が怒るよと家族にも言われた。日本では普通魚の頭は食べないことは知らなかった。高知は私の故郷と似ているけど、風俗や習慣が違うなどその時初めて気がつき、少々不安を感じた。でも、その後、家族が皆優しく教えてくれるし、お母さんも気を遣っておかずを作ってくれるから、すぐ慣れてきて、不安も消えてしまった。

私はそれから間もなく学校に通い始めた。大陸生まれの私にとってはやはり海を一番見たかった。ある日曜日、お父さんに海へ釣りに連れて行ってもらった。初めて見た海はとても青くて、終わりの底もないように見え、感動的であったが、波が想像したより静かだったことが少し残念に思った。波の高い日には釣りに出られないことを当時の私は知らなかった。その日の釣果も悪くなく、メジカを何十匹も釣って帰って友達に配ったり、刺身にしたり、炊きこみご飯にしたりして、大変面白かった。それから私も釣りが好きになった。日曜日は天気さえ良かったら、必ずお父さんに連れて行ってもらい、海上で過ごすようになった。今会社に勤めても依然として前のように毎日こよみを見て、天気予報を聞いて、日和のよい休日になったらまた

お父さんに連れて行ってもらうようにしている。あつという間に二年半の留学生生活が過ぎ、二年予定の会社研修も終えようとしている。思い返せば苦勞も、残念なことも少なくないが、やはり美しい高知、優しい土佐、楽しい思い出がこころにいっぱい残り、高知に来て幸いだなど思っている。

（渋谷食品株）

## 特急列車南風の二つの旅

ウィリアムス・エドワード



高松を出て私たちは次から次と、窓を開めたり開けたりしていました。トンネルに入るとちやんと窓をしめてなかったら、ススが入ってワイシャツが汚なくなってきた一九五八年の特急南風。九州の福岡から初めて来高した私は、日本語が出来なかった。数カ月しか日本にいなかったアメリカ人の私の目で見えた高知は、どのような町だったか。あの時の高知と今の高知はどう変わったか。変わった点でよくなっているのは、違いは何？

若者はもっと多かった気がする。いまの高知は熟年者・シルバー姿の人々の町になっているようです。自分がシルバーになったからそう見えるかも知れません。当時レストランに入ったら、ガールフレンドに「ナイフ・フォーク」の

使い方を教えている若者がいました。一九五八年に外国へいく日本人はあまりいなかった。いまはよくいきますので、その教えが必要なくなつたから一つのなつかしい情景が消えました。現在なら欧米人がとなりのテーブルに座っているかも知れません。帯屋町を歩けば数人の欧米人に出会います。あの時代には捜しても見つからないぐらいの存在でした。

第二の故郷の話なら何よりも人の話ですが、川、道、橋、建物、全部がその人たちの舞台となつています。高知は川に恵まれた地です。この三十五年間高知の川が汚染されてきて、もう一度きれいになりかけています。この川にかけられた橋は、美観を忘れた川をわたるものだけでなく、美しい自然に恵まれた高知にふさわしい芸術でもあります。はりまや橋で知られている高知に適していると思えます。道もみごとによくなつてきた。遠く高松までも二時間少々しかかかりません。あの当時に倍以上かかったのに。私がよく利用する土佐道路はどんなに美しく飾られているのか。あちこちの道の分離帯両側の花、植木などはどんなに人の目を楽しませてくれるか。

昔のままに高知城が小高い山の上に聳え立っているが、町は新しい高層ビルに満ちています。今年最高に高いビルは来年二番目になるだろう。発展したことがたくさんありますが、この町の美観に影がかかっています。例えば、昔は目につかなかった空きカンがあります。いまはどんなにきれいな花壇、道端、とくに信号の辺にも空きカンが捨てられています。電話ボックスはタバコの吸い殻で汚されています。年をとるに

つれてこうしたことに対して敏感になつたか、昔のマナーがもつとよかつたか、よくわかりませんが、もう一つ昔になかったが今目ざわりなものがあります。それは自動販売機です。どこにも見当たります。収入が必要だからおいているだろうが、なければ、もつといいと感じます。利益、便利さを優先し、大切なものを無くしています。

一九九三年七月二十七日に南風7号で阿波池田から高知に帰って来ている内に、このようなことを考え巡らしていました。あれほど綺麗な早い南風の床にも、空きカンが捨てられています。

日本の生活様式はカナダととても違いますから、たくさん物事に慣れなければなりません。例えばお箸や布団や小さなアパートなども、日本語が一番難しかったです。日本にきたときに、日本語を全然話せませんでした。食べ物と日用品を買いたかったときに、とても気をつけなければなりません。ある日、魚のサンドイッチを買いました。魚が大嫌いです。ほかの日チーズとパンを買いました。アンパンでした。それぞれはおいしいですが、チーズとアンパンと一緒に食べるのはちよつと変でした。食べ物を買いに行くときにまだ心配があります。現在では質問することができます。

最初はすべてが大変難しかったです。日本について習いたかつたので、たくさんさんの時間をかけて努力しました。そして少しずつ高知は私の二番目のふるさとになりました。

高知の人は親切です。「まいご」になつた時に、見知らぬ人は私を連れていってくれました。反対方向に行くかもしれないけれどかまわず連れて行ってくれました。ふだん自分のことは自分でできるけれど、ある事を一人でやる事ができません。その時に安心して助けを頼むことができます。

ある人は一生懸命英語を話そうとします。一方では、ある人々は私を見る時に怖がります。他のわく星の人みたいに。高知に来たのは嬉しかったです。二番目のふるさとになりました。しかし、いくら長く私がこのすばらしい土地に住んでも、いつまでたっても外人という目で見られるのでかたしです。

（高知女子大学）



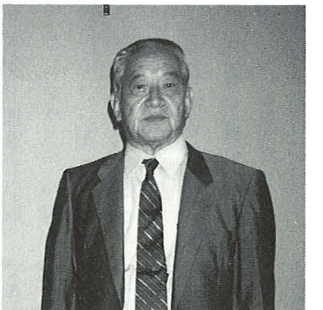
## 土佐の人は親切

リース・デロシ

私はカナダから来ました。今まで三カ国と十都市に住んだことがあります。二年前高知に来ました。ここに来る前、日本について全然知りませんでした。しかし新しい挑戦がしたかったのです。

激動の中で

山内 豊秋



● 昭和の初め

昭和の初めは師走二十五日、私は東京陸軍幼年学校の一年生だった。明けて春浅い二月七日、大正天皇の御大葬、凍てつく寒夜に、牛車の咽び泣く軋みが、十四歳の耳底に染み着いた。

昭和の初め、世は暗かった。第一次大戦の漁夫の利は身に付かず、関東大震災の被害に消え、軍備は世界に取り残される。日露戦後アメリカのアジア政策と対立し、四周から圧迫される。雇用がなく、銀行が潰れ、移民排斥、戦艦「土佐」は軍縮で沈められる。汚職続発、農村の娘さんが売られ、青年将校は、これでは国防が出来ぬと騒ぎだす。私も一時革新を夢見た。昭和六年九月十八日満州事変勃発、私は近衛歩兵第一聯隊の士官候補生。重圧が取れた感で、

世の中は活気づき、私の革新志向は憑きが落ちた。世相に効果大と思う。七年五・一五事件、なくもがなと思うが、関係者に尊敬する人が多い。

● 二・二六から開戦へ

八年七月陸軍士官学校卒、九段の聯隊で見習士官、秋、少尉任官、初年兵教育に専念。夜になると若い士官が来て、今こそ決起とアジる。私は最早相手にしなかった。十一年二・二六事件勃発、私は千葉の歩兵学校通信学生、前夜来の大雪の中で、無線機のキーを叩いていた。君側の奸を除いたつもりが、天皇の激怒を招く、私は吉田東洋の暗殺と、容堂を連想する。

翌十二年七月支那事変(日中戦争)勃発、これは先方の挑発だ。拡大を懸念するが、快哉でもあった。ただ泥沼は絶対不可だ。秋、陸大入

学。十四年ノモンハン事件・欧州大戦起こる。秋、陸大卒、東京青山の留守第一師団参謀。翌年九月三国同盟、大戦突入のターニングポイントと思う。どこかと組まねばやれぬが、米・英が駄目なら独・伊しかない。負けられては困るが、この頃景気はよい。

十六年四月参謀本部部員、第六課勤務。元来欧米の情報担当だが、南方班に配属される。先輩の参謀は、商社員や船員に化けて南方に往来する。敵情・地誌・地図集めに追われる。

松岡外相訪欧、日ソ中立条約締結、六月独ソ開戦、先行き不安且つ不義理で、独と別れるなら最後のチャンスだが、独伊一辺倒の空気で、考えなかった。関東軍特別演習(対ソ作戦準備)始まる。八月作戦室で南方兵棋を辻参謀司会、彼が大戦最大の火付役と思う。敬服する人だが、批

● 戦況

判も多い。十月東条内閣成立、先輩が「あんな小粒では」と嘆く。昭和天皇のお覚え目出度いが、能吏的な故か。マレーの海象から、開戦は秋が好い。海軍の戦備も整い、十月の開戦予定が延びて気が焦る。対米交渉やり直す、十一月末のハル・ノートで事終わり、十二月二日「ニイタカヤマンボレ」発電。ストップ掛からず日が過ぎる。

十二月八日朝、軍艦マーチと共に開戦第一報。ハワイの大戦果、マレー上陸の成功、全身が痺れる。十七年二月十五日シンガポール陥落、花の都は歓声に包まれた。講和の好機と言うが、私は浮かれていた。作戦地外周の地誌準備に追われる。四月十八日、怪飛行機帝都を飛び抜ける。ドウリットル空襲で、急遽ミッドウエー(Midway)作戦となり、戦況が暗転する。陸軍は一木支隊を派遣、私は派遣参謀を命ぜられた。サイパンで上陸訓練、艦隊の護衛で太平洋を東進。B17編隊の爆撃あるも命中せず、上陸前日空母は島を爆撃し、敵の混乱を傍受するうち、「飛龍大空襲」など悲報入り、反転グアム島上陸、部隊は軟禁、私は視察申請し、ケゼリン・ラバウル・ツラギ・ラエ

を回る。ツラギから飛行艇でエスピリッサント島に、貨物船の着岸を発見。反攻の前触れだ。東京に戻ると、ガダルカナル・ツラギに敵上陸、一木支隊を指向、歩兵一大隊基幹で、輸送が二分された。上陸成功に大本営は安心したが、潰滅の報に啞然となる。「お前見て来たから行け」と十七軍参謀に発令され、参謀次長と軍令部次長のラバウル出張に同行赴任した。トラタツ島で戦艦「大和」に、山本五十六大将を訪う。

第八方面軍が出来、三十八師団来援、資材揚陸出来ぬ。服部作戦課長、辻参謀、黒水病で帰還。中央では十二月、ガ島撤退決定。私はマラリアで召還、潜水艦で離島。途端に私のいた所に艦砲命中。参謀二名戦死。陸大付、参本総務課付、第一総軍を経て、二十年五月東京湾兵団参謀。那古船形(なごふねがた)で穴掘り中、原爆投下、ソ連参戦と戦況逼迫する。

● 戦後

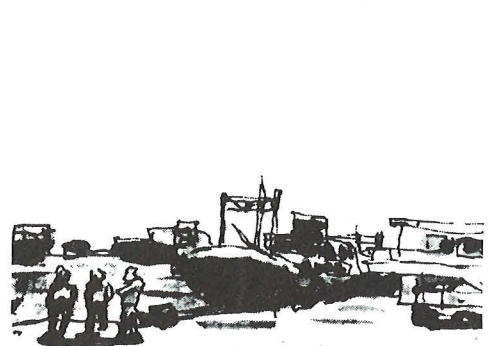
部軍に連絡する。十五日玉音放送、再上京。会ったばかりの森師団長凶刃に倒れ、古賀参謀・椎崎中佐自決。市ヶ谷台は書類を焼き、荒尾課長もサジを投げる。終戦を見届けて帰る。同じ司令部の中島参謀は、「皇太子を奪取せよ」と飛び回る。

十月復員、黒岩村の疎開先に帰る。山芋を掘り、菜っ葉を植えると頭が冷えてきた。年の暮から家事手伝い。財産税で悪戦苦闘する。三十年頃から十年余、通産省通商調査課に勤務。絶えず貿易黒字を願ったことが夢のようだ。今身辺少しく落ち着き、道楽仕事に家史・藩史等整理中。

● おわりに

思えばガ島の飢餓と終戦の時、私の人間体験の究極に思われる。それにしても大戦は避けられなかったか。犠牲があまりにも多く、戦後の努力も大変であった。

八艦司令部で、ガダル敵陣の空中写真を貰う。参謀長の命で、ガ島へ急行、軍戦闘司令所に届け、伝言す。攻撃当夜、大銃砲声起るも、暫して止む。攻撃不成功。白兵ではだめ。



● 終戦

八月十三日東京、終戦の雲行き偵察する。同郷の教官森近衛師団長、市ヶ谷に荒尾軍事課長等を尋ね、東

昭和の星霜六十余年、その終焉に当たり、武蔵野の多摩の御陵に、囃らずも祭官副長として、昭和天皇をお送りした。私一生の思い出である。昭和は私の人生そのものである。その激動の歴史から、次代の指標を見出して頂きたい。(山内興業(株)取締役会長)

チターの魅力
我が夢の街ウィーン
内藤敏子チター演奏会
1993年10月16日(土)
開場●13:30 開演●14:00~15:30
●ラ・ヴィータホール ●2,000円(全席自由)
主催●土佐エルブの会・高知市文化振興事業団
\*お問い合わせは事業団まで。

# 高知の山と森 (九)

## 不入山と天狗の森

西村 武二

仁淀村の鳥形山から天狗の森を経て大野ヶ原に至るその距離二五キロの石灰岩地帯を四国カルストという。国の天然記念物に指定されている山口県の秋吉台、福岡県の平尾台に標高と長さにおいて勝る山岳カルストである。このカルストの盟主、天狗の森（一四八五メートル）が四万十川流域の最高峰になる。この山と四万十川最上流の北川川を隔てて向かい合うのが不入山（一三三六メートル）である。今回はこれらの山々を紹介しよう。

### 不入山

四万十川の源流とされている不入山はコウヤマキとシヤクナゲの山と違ってよいだろう。本山の白髪山をヒノキとシヤクナゲの山というように紹介しよう。

仁淀村と東津野村の境の矢筈トンネル東口から船戸方面へ約一・五キロ入ると、船戸林道の入口に着く。ここに車を置いて、林道を約一時間歩くと不入山の北登山口に着く。二次林の中の歩道を少し進むと涸れ沢に出会う。沢の右岸に急登する道がついている。別に沢を渡った先の尾根に登るルートもある。登りは沢ルートをとろう。岩がゴロゴロしたしかも急坂でしんどい登りだ。しかし高度はほとんど稼げる。よほどこの谷は湿度が高いのか沢筋や、両岸にそそり立つ岩という岩にはコケがびっしりと付いている。岩壁に張り付き、その割れ目に根をしっかりとくいませてしがみついているのはヤマグルマだ。やがて沢の上部にスズタケがでてくると沢を横断して支尾根に出る。ここで下からの尾根ルートと出会う。ブナが優占する落葉樹林の斜面を横断して頂上へと続く北西尾根に出る。狭い尾根筋にはコウ

ヤマキやヒノキの大き木が次々に現れ、シヤクナゲ、アケボノツツジ、シロヤシオが寄り添う。岩尾根の隙間を埋める土壌にコウヤマキなどの根がマット状に広がるためか、歩くとフワフワとして足裏に心地よい。不入山太郎坊と名付けられたヒノキの巨木があった。天狗の住処ということだろうか。広い尾根筋はブナ、ヒメシヤラ、リョウウブ、コミネカエデなどの落葉樹林になっている。頂上は平坦地で一等三角点、東から南に開いていて晴れていれば室戸岬まで見渡せるという。ここまで登りに約一時間要する。下りは尾根ルートをとろう。急傾斜の尾根を、細い幹をつかんでバランスを取りながら下る。コウヤマキとヒノキが混生し、シヤクナゲとヒカゲツツジが密生するルートだ。花期にはどんなに美しいことだろうか。下りきった所からルートをはずれて少しおりと、急傾斜の斜面にコウヤマキの大き木が林立し、林床にはその褐色の落葉が厚く堆積し、シヤクナゲが疎生している立派なコウヤマキ林が見られる。

ルートの斜面を横断し、はじめの登り口の涸れ沢に戻る。不入山の名にふさわしい急登降のきつい山だが、距離が短いし、コウヤマキとシヤクナゲは一見の価値がある。花の時期の五月中・下旬が素

晴らしいという。

### 天狗の森

天狗の森から黒滝山、大引割・小引割への縦走コースは車で走り抜けるカルスト高原とは異なった森林浴の散策路だ。

### 国民宿舎「天狗荘」から東へ、瀬戸見の森（一四七五メートル）へ上

がっていく。ここからは瀬戸内海が見えるという。やがてウラジロモミの森林に入る。林内は落葉広葉樹も混じり明るい。すぐにウラジロモミやその他の低木が散在するスキの草原になる。石灰岩の露岩も沢山あり、西の天狗高原のような草原に樹木が侵入しつつある状態を示している。四十分足らずで天狗の森に着く。ここから東へ黒滝山方面へ下る。

ガスの中から黒滝山の左手に頂上部分を削り取られ、台地状になった鳥形山の白ザレが雪溪のように見える。石灰岩採掘前は天狗の森に次ぐ標高を誇る実に秀麗な山であった。四国カルストが県立自然公園に指定された機にこの山から引割峠、黒滝山、天狗の森への縦走路一・二キロが開設され、大野ヶ原からの歩道に接続し、ここに鳥形山から大野ヶ原までの総延長三〇キロにも及ぶ西部縦走遊歩道が完成したのは、昭和三十六年のことであったという。これは昭和初期の石鎚山系東部の国境歩道

に匹敵するものであった。

下るにつれ森林に入っていく。林床はササ、様々な大きさのウラジロモミが混じり、クマシデ、ハリギリ、シナノキ、ミズキ、コハウチワカエデ、ウリハダカエデ、チドリノキ、ヤマグワ等々、ササの中にはコケむ



黒滝山のヒメシヤラ林

した石灰岩の露岩も見られ、カルスト台地の草原から森林への遷移がより進行している。北の仁淀側はブナ林である。登りになっても同様の素晴らしい林相が続く。登りきれば岩の間を縫う道となり、小さなピークを越えて黒滝山（一三六五メートル）に登り着く。下れば今までの道よりさらに整備された「四国の道」に入る。しばらく両側にスズタケの密生した暗い道が続くが、仁淀側に回り込んで平坦になるとブナ、ミズナラ、モミの大き木の混交林とな

り、暗い森の中にヒメシヤラの幹の赤銅色がひととき鮮やかに映える。百本近いヒメシヤラが斜面一帯にまとまって生えている所がある。ここがヒメシヤラ林だ。この先、仁淀側の斜面は深いブナ林で、林床はササを欠き、様々な草本からなっている。このコース中最も見事な林相の所だ。黒滝山風景林という。東津野側の斜面に回り込むとそこは若い落葉樹林で、緩い傾斜を下って平坦になったところが大引割・小引割である。ミズナラ、ブナ、ヒメシヤラ、リョウウブなどの若い

林で、林床はスズタケが茂っている普通のごくありふれた所である。しかしここにすさまじいまでの地割れが走っているのである。ササがなくなり地面がむき出しになっている所を亀裂の縁までおそるおそる近づいて、傍らに立っている頼りになりそ

うな木にしがみついて亀裂の中をのぞき込んだ。地表近くの赤褐色の岩肌ははつきり分かるが、その下は暗くてまるで底無しのように思える。地の底に引き込まれそうで、高所恐怖症でなくとも足のすくむ感がある。地割れの東の方の土石で浅く埋まっている所から地割れ上部がよく見えるが、底は暗黒の中に消え、霧さえ漂い、うかがうことはできない。ササの中の小道を北へ進むとシヤクナゲのある小引割に至る。これらには有史以前の大地震によってチャート（珪岩）にできた亀裂ということだ。大引割は長さ八〇、幅三〇八、深さ三〇メートル、小引割は長さ一〇〇、幅一・五〇五、深さ二〇メートルの大亀裂で、三〇メートルの間隔で平行して東西に走っている。昭和六十一年に国の天然記念物の指定を受けた。帰路は天狗高原まで約四・六キロのよく整備された「四国の道」をたどればよい。起伏もほとんどなく落葉樹林の中を通るこの道は森林浴に最適である。新緑の時、紅葉の時、花の時、そして積雪の時にも、四季それぞれの森林の表情が楽しめる。牧柵に囲まれた草原のカルスト高原も風情があつてよいが、すぐそばにそれ以上素晴らしい変化に富んだ森林がある。

（高知大学農学部助教授）

山本 大著 幕末の青春 坂本龍馬の生涯 定価一、二〇〇円	依光 裕編著 珍聞土佐物語 上下巻 定価一、四〇八円 （高知レポート6）	鈴木文彦・井本正人・関根徳一郎著 協同組合と地域づくり 定価一、〇〇〇円	外崎光広著 土佐自由民権運動史 定価二、八〇〇円	外崎光広編 土佐自由民権資料集 定価三、〇九〇円	土居重俊監修 高知市文化振興事業団編 土佐弁 土佐日記 定価一、〇〇〇円	岡林清水著 高知県文学散歩 定価一、八〇〇円	高知の文化を考える会編 高知の文化を考える 定価一、二〇〇円	高知市文化振興事業団編 わがまち百景 定価一、二〇〇円	筒井広重著 画帳の歳月 定価二、〇〇〇円	土居重俊・浜田敦義編 高知県方言辞典 定価六、一八〇円	高木啓夫著 土佐の芸能 定価四、九四四円	清水孝之著 中山高陽 定価三、九一四円	清水孝之著 高知県の工業 定価一、〇〇〇円	今井嘉彦著（高知レポート2） 河川によれば都市が 定価一、〇三〇円
------------------------------------	---	--	--------------------------------	--------------------------------	---	------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------------	----------------------------	-----------------------------------	----------------------------	---------------------------	-----------------------------	---

# イスラエルの子どもと聖書

江島 民恵

前回、イスラエルにあるキブツは、大小合わせて三十個程となっていました。三百個のキブツの人口は、だいたいイスラエルの人口の三パーセントにあたりますが、キブツがイスラエル国家に果たしている役割は多大なものがあります。

今回はキブツの中で育っていく子どもたちにスポットをあてて、ご紹介していきます。

ここでキブツの役割を十分ご紹介出来ないのは残念ですが、イスラエル国家を支えているキブツを今後担っていくキブツの子どもたち、言い換えれば、未来のイスラエルを担う子どもたちなんです。

ユダヤ人の子どもたちは、学校の授業の中でトラー(聖書)を学びます。日本では、公共の場で宗教的なものを学習するということは、ぴんとこないと思いますが、彼らユダ

ヤ人にとってトラーは、彼らの歴史そのものなんです。

私がホームステイとして与えられた一家族に中学一年生になる男の子がいましたが、学校から帰ってきてお母さんと話している話の中に、「今日は、トラーの授業でモーセのことを学んだよ」と内容を語っていました。私も一度、彼らの教室を見たことがあります。机の並べられた後ろの棚にヘブライ語でトラーと書かれた五センチ程の黒本がずらりと揃っていました。

私は、それを見た時、何とも不思議な気がして、聖書の国イスラエルへ来たんだなあ、としみじみ感じたものです。

ここでトラーと呼ばれるものは、ユダヤ教では、モーセ五書(旧約聖書)のことを指しています。もう少し彼らが成長してからのことですが、ユダヤ人にとってこのトラー

がどういふものであるのか垣間見ることが出来る話の一つありますので、ご紹介したいと思います。

キブツの子どもたちはもちろんのことイスラエルの十八歳になる男女は、兵役の義務が課せられています。女子は二年、男子は三年の訓練期間があるのですが、その期間を終えた時に入隊宣誓式が行われます。その後、各所属部隊へ配属されていくのです。



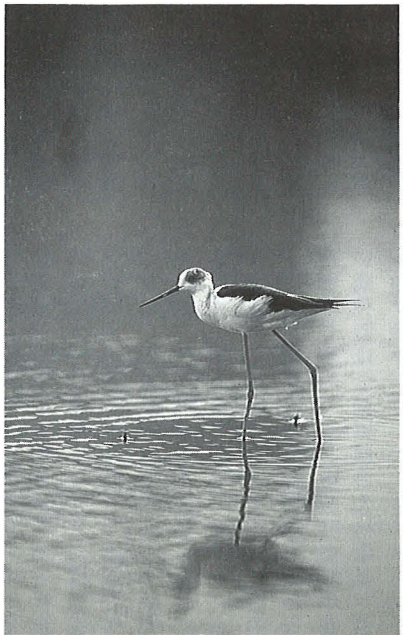
少年の宗教家トラー(聖書)を壁の嘆きで読む

この入隊宣誓式で、一人一人に銃が渡されるのですが、単に銃を渡すのではないのです。先ず整列した数百名の若い兵士たちの前に国旗が掲げられ、聖書のヨシユア記第一章が

## 土佐の野鳥 (二)

# セイタカシギ

山下 隆文



全長約三十二センチ、主に旅鳥として渡来するが、多くない。日本でも少数は局地的に繁殖している。

北国で夏を過ごしたシギやチドリ達は、まだ暑さ厳しい八月末から九月にかけて、寒い冬を越すため、南国への渡りの季節を迎える。

この渡りの旅の途中で、日本のあちこちの干潟や水田などで羽を休めることから、秋の使者といってもおかしくない。

日中の日差しはきつい、日が西に傾くころになると、川面をさわやかな風が渡る物部川河口、九月、澄みきった高い青空に、「ビューー、ビューー」「ビューー、ビューー、ビューー」と、その青空以上に高く澄みきった声が聞こえてくる。シギやチドリ達の声だ。

このさわやかな風とともに聞く、シギやチドリ達の声は、なぜか心の中に響き渡る。バードウォッチャーの多くは、この初秋独特の空気感とともに聞く哀愁に満ちたその声で、秋を感じるという。

干潟の少ない高知県では、この物部川河口周辺が、シギやチドリ類の重要な渡来地である。

ここに渡ってくるシギ、チドリの中に、時々、セイタカシギの姿を見ることがある。ほかのシギ達と比べると、背が高く足が長いだけでなく、白と黒、光線の状態によつては、その黒が濃いグリーンに見える羽色は、地味な羽色の他のシギ達の中では、一際目立ち上品で気品がある。その容姿から、英国紳士にたとえるバードウォッチャーも多く、人気者だ。

私が初めてこの鳥を見たのは、十三年程前、所用で南国市の十市へ行った帰りのことである。瑞山神社前にさしかかり、苗を植えたばかりの水田の中に一際背が高く足の長い美しいこの鳥を見た時、その両方を持ち合わせていない私は、瞬時にこの鳥のファンになってしまった。

当時、高知県では、ほとんど確認例がなく大きなニュースになったことを覚えているが、最近では、春と秋の渡りのシーズンには、数は少ないが必ずといっていいほど確認されるようになった。これも、その頃と比べるとバードウォッチングが市民権を得て、鳥を見る人が増えたことが一つの理由だと思う。嬉しい限りである。

シギ、チドリ類は、毎年同じ場所で羽を休めるようだ。たとえば、吉

朗読されます。そして、部隊長から右手に聖書が渡され、次に左手に銃を渡されます。その時の部隊長の挨拶が素晴らしいんです。

「聖書があなたがたの希望であり、祈りである。銃は鉄の塊にしか過ぎない。これを用いるのは人間の心である。これから銃を渡すが、このような武器は無用になることを願う。これより君たちは、ユダヤ人として一意専心、国の守りにつくのである。宣誓とは生命を捧げた誓いである」

私は、この話を聞いて、とても感動し、ユダヤ人一人ひとりの中を確実に貫いているトラー、精神を感じる事が出来ました。そしてまた、日本人の中にもこのような貫かれてきた精神があるはずだし、武士道といわれるものや、茶道、華道などにも貫かれている道に立ち返りたい思いが込み上げてきました。私は日本人なんだとイスラエルに来て初めて思いました。ユダヤ人を見てると二千年も国がなかった民族とは思えない程、民族性というものを濃くもっています。その基盤には、トラーがあるからなのでしょう。

次回に、もっと子どもたちの教育の具体的な例を出しながら、キブツに育つ子ども達の生活をご紹介します。いきいたいと思っています。

(柳モックス 細木建築研究所)

川村には、区切られた幾つかの水田があるが、必ずといっていいほど同じ水田で羽を休め、餌を捕り南へと渡っていくのである。私の勝手な推測ではあるが、鳥達は、高知のあの水田で、あの干潟で餌を捕って一休みしようと思つて来るのだと思う。もし、その水田や、干潟が埋め立てられたりしていたらどうなるだろう。北の国から、そこを目標に渡って来た彼らは、その場所を探し、さ迷い力尽きてしまうかもしれない。

今年六月、ラムサール条約締結国会議が北海道で開かれた。

このラムサール条約とは、湿原、湖沼、河川、水田、干潟、珊瑚礁などの水辺の生態系も保全することを目的にした条約である。

現在、日本国内では釧路湿原ほか三方所がこの条約によって指定されているが、この会議によつて新たに数カ所が追加された。しかし、それ以外にも渡り鳥にとってかなり重要な渡来地があり、自然保護団体より指定するよう求められたが、地元が開発計画があるために見送られた。国境のない鳥達のために、湿地や水田を守ることも一つの国際貢献ではないだろうか。また、水辺の生態系を守ることは、人間自らの命を守ることに必要なのである。

(写真家)

# 私の国際交流デー

永田 和子



「高知日仏協会」が十年目に再発足することとなり、七月十日、立命館大学国際センター所長アンドレ・ブリュネ氏の講演会が開催された。演題は「フランスの総選挙とこれからの日仏関係」で、十八日の衆議院議員総選挙を控えてタイムングのよい演題である。

氏は元駐日総領事で、任期後そのまま日本に居残ってしまった大の日本ファン。滞日も長いので日本語は流暢、敬語用法も完璧、「質問の方はもうあらしまへんか」と関西弁も巧妙に使いこなす。実はこの春、フランス総選挙直後のパリに出かけて見聞したことが気になっていたので、私は会場の国際デザインカレッジに出かけていった。

パリのノートルダム寺院の前の広場をはじめとして、拳銃を持った女性警官があちこちに立っている。案内役の田部淑子さん（高知大学独文科の卒業生でドイツ人画家ヤン・ホ

ス夫人）に数年で変わったこの有り様を不思議に思っただけで済ませた。「総選挙のあと、パリ市内の警官の数がぐっと増えました。でも極右は落選したのでよかったです」とのこと。

そして夕方、パリ市庁舎の前を歩いていると、トイレットペーパーが白い波のようにあちこちにひっかかっている。何だろう。

「デモがあったのですよ。フランスでは、いつも十パーセントの反対勢力があつてバランスを取るのです」

ブリュネ氏はフランス政界の成立を歴史的に説明された。一九三二年に人民戦線が内閣を取って先ず有給休暇、いわゆるヴァカンスを制定し、フランス人は遊んで、その合間にドイツ人は武器を作る歴史がはじまつた。ラテン語をやめてフランス語で書くことに決めたフランソワ一世から中央集権がはじまり、一八八九年パリに二万一、〇〇〇人の全国市長

が集まったそう。食事は？ 会議場は？ この問題に一九八一年ミッテランがストップをかけて地方自治に力を入れはじめた。女性大臣となつたシモーヌ・ヴェイユは、今も女性政治家実力ナンバーワンであるが、ユダヤ出身を突く人も多い。パリ市長と大統領の不仲。

ご多分に洩れずフランス政府は借款が大きく、企業の民営化をねらっていて、槍玉にあがっているトップがエール・フランスである。この春搭乗したエール・フランスは男性黒人パーサー、中年フランス女性スチュワーデスが目についた。語学力、マナー、体力いやはや黒人パーサーに脱帽。「探偵小説家ジェシカおばさん」まがいの中年スチュワーデスの落着いた、ポイントを決めた機内サービスぶりに旅の安堵感を味わつた。パリからミラノの数時間の小さい飛行機は全員男性白人搭乗員、「オクサマ、コーヒーニイタシマシ

ヨウカ。コーチャニイタシマシヨウカ」綺麗な日本語で応対される。いかに日本人旅客が多いかがわかる。大阪から香港まで隣り合わせた中国人青年は商人で、バブル崩壊の痛手は受けているが、「一九九七年六月三十日！」香港借款解除の期日を即座に口にする男性であった。

その講演会の終わった夜、高知市内在住のモロッコ人、ヒズレーヌ氏がミニコンサートを自宅で開くので誘って下さった。三人の男の子の育児真っ最中の和子夫人のご配慮を思うと感謝の極みである。空襲をまぬがれた古い日本家屋の小さい自宅で、岡山から来た中国青年田さんの胡弓を聴く集まりであった。

高知も国際的になったものだ。農業大国フランスとの関係はうまくいきますよとブリュネ氏は言われたが、フランスのノルマンディーで食べたリングゴはみかけが悪く、小さく、少ししぶい味もした。子供の時に食べた日本のリングゴの味である。しかしフランスのリングゴタルトは生まれてはじめて食べた美味さだったし、リングゴ酒シードルも上等。甘くて大きい日本のリングゴとくらべてみて、フランス人は意外に剛直な精神の持ち主であることを悟らされる。

（元高校教員）

# 酒蔵に生まれ

山本 紀子

こじやんとうまい「土佐の酒」

飲んでみたい「土佐の酒」

土佐の地酒は土佐の財産、地域の宝

歴史の深い地場産品

ひとりひとりが宣伝人

負けてたまるか「酒国土佐」

酒で育った土佐の風土

龍馬が泣くぞ、さばらにゃあ

外酒を飲たらいかんぜよ

「土佐は酒国、地酒の国」

終着駅は「地酒会館」。

土佐II（イクオール）「酒」と思

わない方は手を上げて……（誰もい

ない）でしょう。

この広告宣伝費ゼロの土佐文化を県民あげて発信しない手はないと思われませんか？

宇宙から円い地球を俯瞰すれば自ずとその地域の果たすべき役割、守るべき文化、そこでしか育たないものは何か、が見えてくる。砂漠のど真中で木を育てる努力、熱帯雨林に平原をつくりだす馬鹿らしさ、海を、

ばれている。

わが郷土、高知は西から東まで長い地形であり、それぞれの地域に数十年から何百年という歴史を守り必死の抵抗をし頑張っている二十一の蔵元さんがある。これぞ究極の「地場産品」といわずして何であろう。にわか誘致したものでないから世の中不況になっても逃げる事はない。次の世代へ引き継ぐべく、わが資産を切り売りし、その土地ではもう決して今から興しても育たないであろう歴史と地域の宝物を守っている。

この大切な地場産品、産品を媒体にすれば数限りないバリエーションで「村おこし」「町おこし」、世界でたった一つの特色を持った地域おこしの起爆剤になると信じています。酒国土佐での世界を集めた「お酒サミット」の毎年開催も夢ではない。お酒の命は、美しい水と純粋な米、お酒造りが最後まで残れる環境は人にも動物にも地球にも、最も優しいくらしを保証している。地域の酒造りを守り残すこと、即ち命を守ることに一直線。

お願いがあります。「地酒探偵団」を組織していただけないでしょうか。今、土佐の酒造りを守らねばその地域の核となった往年の文化が消滅します。地酒屋開店の十三年前、二十四あった蔵元さんが今年は二十一、

そしてここ数年の間に三分の一に淘汰されるだろうといわれている。その町の、村の長たるもの、みすみすその地域文化の衰退を傍観しているものだろうか。外に向かつて発信する時、おらが村に「蔵元さん」が無失したことであり、何年か先、必ず後悔するはず。私はそう確信します。だがこれはあまりにも私の思いがかり、思い込みのしすぎでしょうか。「土佐鶴は土佐鶴」「司は司」、その逆は決してない。それぞれ何百年も培ってきた伝統と歴史の背景があり、他が真似のできるものではない。これぞ個性を持った地域文化の最たるもの、海は海、山は山、沼は沼、異質なものがそれぞれその持ち味を輝かせてこそおもしろくもあり、楽しくもある。



「土佐の地酒は土佐の財産、地域の宝」、私の夢に共鳴し、共感し、燃える雰囲気の大好き、心を寄せて下さる皆さん、是非とも土佐地酒の存続と発展にお力を貸して下さい。

（地酒屋店主）



# 文化遺産がいつばい

## 山内神社 宝物資料館

筆山を写す鏡川の河畔、山内神社境内の森に、山内神社宝物資料館は貴重な文化遺産を内蔵してひっそりとある。

この館の設置されるまでの経過を述べると、山内神社は藩が廃止され県が置かれた明治四年（一八七二）、時の藩知事山内豊範（十六代）が祖先の霊を祀るため、現在の所に社殿を造営したのがその起りであり、それから時が流れ世が変わって昭和七年（一九三二）、十五代藩主豊信と十六代豊範の幕末維新における功績を顕彰するため、新しく別に山内神社（別格官幣社）が創設された。（その時、豊信・豊範以外の歴代藩主の霊は藤並神社にうつされた）この新しく造られた神社が、現在の山内神社の前身である。

昭和二十年（一九四五）戦火により社殿を焼失し、その後二十五年間復興されなかったが、この再建にあたり、これを記念して付設されたのが現在の山内神社宝物資料館である。ここでは、これまで秘蔵されていた神社の宝物と、山内家伝来の歴代藩主にかかわる遺品などの所蔵品を公開している。

収蔵品を分類すると、書蹟三〇二点、絵画二三四点、漆芸品四一点、楽器一六点、染織品一一五点、雑道具五六点、香道具一三三点、茶道具一六三三点、狂言面一四九点、武器・武具類約三八〇点の多くを数えている。

このほか古文書類が三万点はこれといわれ、これだけでも独立した資料館ができそうである。展示は常設展、特別展を併設し、常設展では錦旗（錦の御旗）、節刀、初代一豊夫婦の筆跡と画像、二代忠義以下十六代豊範までの藩主の書画、鎧、兜、調度品などを、また特別展は兜、能面、茶道具、雑道具、手鑑などを一〜二カ月毎に入れ替えている。こうして入館者は常時四、五〇点の貴重な品々を鑑賞できるわけである。



山内神社 宝物資料館

この館が所蔵している資料をその内容・性質の面から大きく分けるとすれば、歴史的に見て意義があり価値があると考えられる歴史的資料と美術工芸品として優れた価値が認められる美術品の資料とに大別される。歴史的資料のなかで、「恩賜の太刀」と並んで「錦の御旗」は最も貴重なものの一つで、当時（慶応四年一月）数多く作られたが、現存するのは全国で僅か数本しか無いという。初代一豊の書蹟も数点あるとされるが、直筆と断定できる物は「神

と書いた一字書のみで、それだけにまた貴重な歴史的資料といえる。美術品の資料の白眉は、何といっても雑道具であろう。葵の紋の入った雑道具は、家康の養女阿姫が二代忠義の許へ興入れの際持参したもので、その精緻と美麗に目を奪われる感がする。

書蹟・絵画は合わせて五百余点におよぶが、その殆どが美術品としての価値を有しているといってもよく、主として藩政時代の作品が多く、江戸時代の美術を探るうえでも真に好個の資料といえる。

このほか前述したとおり、漆芸品、染織品をはじめいろいろあるが、武家であった大名山内家伝来の貴品としては、鎧や兜などの武具が残されているのは当然で、これらは歴史的資料であると同時に美術品の資料でもあり、見るべきものが多い。なお、江戸中期の地球儀や渾天儀とともに、内書、老中奉書、朝廷関係文書等々の古文書は、学術的資料としてかけがえのないものといえる。しかし、これら全てを常時展示しているわけではなく、この物を見たいと事前に連絡すれば、できる限りの便宜もはかるという。意外と足元にあった貴重な文化遺産の数々は、今私たちに何かを語りかけてくれるようだ。（完）



第9回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

## おひるどき 弘田 博敏

一般庶民が自分の墓を持つようになったのは江戸時代からである。それまでは小さな石に名前を刻んだだけのものを、山野や海岸の砂浜に建てる程度だった。庶民が自分の墓を持つようになったのは、檀家制度と関係が深い。

檀家制度は徳川幕府が、キリスト教禁制を強力におしやすめるため、百姓、町人すべてに、どこかの寺院に所属する「檀徒」であることを義務づけたことによる。

これは家単位に行われたので、寺にとつては「檀家」となり、檀家が所属する寺を「檀名寺」（普通檀寺と呼ぶよ）になった。檀徒はひとりひとり「宗門人別帳」に記載され、勝手に宗派を変え、勝手に許されなかった。

### 法事

#### 風俗歳時記



人など故人とつながりが濃い順に、釘を小石でこつこつと二回ずつ打つ。釘を石で打つのは民俗信仰の各残で、石の持つ霊力で死者を守ってもらい、死者の霊がもたらす危害や不幸、災難などを、石で封じてしまう意味をもっている。そして江戸時代の終わりに、庶民も石塔墓を建てるようになった。法事はもともと仏教行事のすべてを指していたが、今日では故人の霊の冥福を願う法要を営むことを指すようになった。追善供養は仏陀に帰依し、仏教を保護したインドのコーサラ国王が父のために斎を設けて、仏陀や僧侶を招いて供養したのが始まりだとい

十九日までの霊を祀っていたが、中国に仏教が伝わってからは、儒教の祖先崇拜思想と結びついて百力日、一周忌、三周忌を加えた「十仏事」になり、日本に入ってきた七回忌、十三回忌、三十三回忌を加えて「十三仏事」となった。

(普)

### 水墨画の魅力にひかれ

谷岡 伸茂

彩楓会は、中央公民館水墨画教室で、県展日本画鑑査の和田薫先生の指導を受けた人達が、その卒業後結成したもので、会員は、現在三十人週に一回先生の指導を受けています。



男性、女性約半々の人数で、習い始めて一年に満たないものから数年になるものまでおり、年一回作品の発表会を開催しています。

昨年は、安芸郡田野町で開催された第一回空谷記念田野全国水墨画展に会員十名が十七点を出品し、それぞれ入選しました。そして恒例の忘年会を取りやめて、一行二十六名がバスをチャーターして勉強かねて見学会を実施しました。

稽古日は、毎週金曜日の午後一時から三時迄で、厳しい指導の中に、日本古来

### 「ハートビート」

### 魂の音楽集団

森 武仁

音楽サークル「ハートビート」は、平成三年の四月に発足したギターの好きな仲間達が集まったグループです。主にロックやフォーク、ニューミュージックなど若者向きの音楽をやっています。しかし内容はオリジナルソング主体でコピーはあんまりやっていません。自分達で作詞作曲をして人前で歌うというのが大前提であります。今までやってきた活動は、一月十五日「成人の日」などに、青年センターの体育館でコンサートをやってきました。他にも喫茶店やライブハウスなどで発表の場を持ってきました。まあ手応えはまずまずといったところでしょうか!!

でもメンバーは目立ちたがり屋ばかりなので、少々のごとめてあげたりはしません。たとえ聞いてくれる人が少なかったも、それを逆にバネにして音楽に励むのが僕達のポリシーでもあるのです。とにかく大事なことは、歌う



### 「ホワイト会」

### 心の豊かさを求めて

池田 和恵

ホワイト会は、十年余り前の市民学校で、寺尾先生に油絵の初歩をお習いし、絵を描くことの楽しさ素晴らしさに魅せられて、「このまま別れ別れになるのは惜しいき続けようよ」ということになり誕生しました。



稽古日である水曜日は、午後六時頃から中央公民館で一週間ぶりの仲間と積もる話に花を咲かせ、絵の批評をし合い、小品や大作を前に眺めたり悩んだり、九時頃までは時間の経つのも忘れて、夢中になって塗り込んでいます。

油絵は初めのデッサンにとらわれないで、途中で手直しすることもできるし、実験的に多様な技術を取り入れ、自分なりの試みに挑戦することもできるので面白いです。とにかく、自由に発想し、あれこれ想

### 土佐病院「絵画クラブ」

### 楽しく描いて、心を開く

伊藤 博子

月曜日の午後一番「リン・リン」、デイバックを背負い、トレッドの帽子を頭、自転車のペダルも軽やかに、デイ・ケアセンターにやって来るのは織田信生さん。絵画クラブの講師です。

土佐病院のデイ・ケアは昭和五十六年に開設されました。月曜日から金曜日まで沢山のプログラムが用意されています。デイ・ケアとは、退院はしたけれど、または外来中だけれど、もう少し人とのつきあい方を身につけたいとか、一日をどう過ごしてよいか分からないとか、生活リズムを調整するといった具合に、社会生活へあと一歩という点を訓練する場です。一週間の中で、音楽、陶芸、書道、華道、手芸、サイコロドラマ等々、メニューは盛り

沢山です。その中でも織田先生が担当している絵画は、音楽と並んで人気があります。絵が上手になることより



からの伝統的文化の一つである水墨画を楽しく、和氣藹藹のムードのなかで学んでいます。

風景、花、鳥、動物などすべての分野にわたり、たちどころに作品を仕上げる先生の筆致には息を凝らして見入る会員たちです。

これからも水墨画を通じて趣味を一つでも広げ、出会いを大切にして精進したいと思っています。

興味のある方、一緒に始めませんか。連絡先 高知市大谷公園町四一〇 電話 〇八八八―四三三〇八六

ことが好きでギターを弾くことが大好きでなければ続かないと思います。

只今「ハートビート」のメンバーは五名いるのですが、もともっと仲間を増やしたいと思っています。別に歌が下手でも楽器がでなくてもかまいません。歌が好きで情熱があればすぐに友達になれます。音楽はまた、友達の輪を広げる素晴らしい役割も持っているのです。どんどん参加してほしいと思います。

連絡先 高知市棧橋通二丁目一五〇 電話 〇八八八―三二一四九三二

像しながら色を重ねていくのは、この上なく楽しくわくわくしますが、考えても考えてもイメージが湧いて来なかったり、色の方向がつかめないと、不安と劣等感に苛まれたりもします。そんな時、先生に一言適切な助言をしていただいたり誉められると、明るい気持ちになって頑張れます。

これからも素晴らしい先生の御指導を糧に感性を磨き、いつまでもみずみずしい心で描き続けたいと思っています。

連絡先 高知市新本町二丁目一三三三 電話 〇八八八―七五八五三四

も、とにかく無理をしないで楽しい時間を持つとう、自分流に描こうと織田先生は呼びかけています。また描くだけでなく、展示会を見に行ったり、時には紙トンボや凧、オカリナ、紙のパッチワークなどを作ったり、それを使って遊ぶこともよくあります。

誰よりも一番楽しそうなのは織田先生です。その楽しそうな先生が面白くて、ぞろぞろ患者さんが集まってきました。皆さん、一度遊びにきませんか。

連絡先 高知市新本町二一〇―二四 電話 〇八八八―二一三三六四

### 散歩の途中で



ここは本町二丁目電車通りにあるビルの入口。電車が走り、バスがとおり、沢山の人が行き交う雑踏の近くに、四国特産の庵治石を使ってつくられた石のモニュメント。タイトル FROM SPACE '92 太平洋のなみうちぎわ 作 さとうゆうじ氏。気忙しいまちのど真中のゆとりが、なんともよい。

### 風俗

### 大物は最初から

当時の丸の内高校には南北二棟の校舎を結び渡り廊下があり、その脇にクラブ活動の部室があった。部室は時として我々の喫煙室と化すこともあったが、その中で新聞部室の前だけは悪ガキ達も畏敬を込めた目差して、ちらりと見えては通り過ぎるのが常であった。

部員の数が少なかったが、そこには若

き日のS君とY君が厳然と控えていたからである。S君は弁説あくまでも爽やか、聞く者を陶醉させた。一方のY君は平常は寡黙ながら、一旦口を開けば何人をも納得させる重みがあった。お二人共々にその知性、風貌、物腰が高校生離れをした大人であり、我々同級生の子供っぽさから超然としておられた。

一九五十年代の丸の内高生Y君、山川彦氏はその著書『ほくだけのニッキ』により第二十六回椋庵文学賞を受賞され、これを読んだS君、坂本凡夫氏こと上方芸能編集長・ペンネーム木津川計氏は高知新聞紙上に長文の讃辞を寄せられた(平成五年八月六日付)。

その文中で木津川氏はお二人の高校時代からの交流を記すと共に、山川氏のことを「大物はどこでだって、ゆっくり、最後に登場する」と書かれているが、我々にとってお二人は最後まで、最初から大物であったのだ。

その一方で、新聞紙上にはただの一度も名前など出ずにその生涯を終わるだろう多くの級友達、いつも静かな雰囲気を持たえた新聞部室の前を無邪気に通り交わしていた彼や彼女達が急に懐かしくなるのも、こんなときである。(南北)

# ポリクロスアート'93

～現代美術の様相と断層から～

9月16日(木)～9月25日(土)

9:00～17:00 (最終日は16:00まで)

於：県立郷土文化会館 2階・丸の内緑地 入場：無料

\*高知県内外の現代美術作家の作品(立体・平面)約30点を展示します。

## 古典四重奏団 リサイタル

— QUARTETTO CLASSICO RECITAL —

- ショスタコーヴィッチ 弦楽四重奏曲 第9番 変ホ長調 作品117  
○シベリウス 弦楽四重奏曲 ニ短調 作品56 “親愛なる声”

10月19日(火) 開場 6:30pm 開演 7:00pm

於：自由民権記念館 アトリウム

入場料：2,500円 (高校生以下1,500円)

○お問い合わせ、電話予約：高知市文化振興事業団(☎0888-73-4365)

シリーズ「現代を読む」(9月～12月)

9月14日(火) 私が出会った記録者たち 西村多津子氏  
～自分史の試み～ (飛鳥出版室長)

9月22日(水) 「珍聞土佐物語」裏話 依光 裕氏  
～聞き書きの旅あれこれ～ (高知放送企画事業局 専門委員)

9月29日(水) 出版にみる現代世相 吉村浩二氏  
～金高堂代表取締役社長

10月6日(木) 祭の再生 佐藤恵里氏  
～室戸市佐喜浜の神祭を中心に～ (高知女子大学教授)

10月13日(水) 川の話を 川村 博氏  
～川とのつき合い方とその未来～ (高知市環境課課長補佐)

11月9日(火) 痴呆と医療 真田順子氏  
～医療と福祉の統合をめざして～ (高知医大神経科 精神科助手)

11月17日(水) 痴呆とつきあう 今井清子氏  
～介護の可能性を探る～ (高知県婦人問題 アドバイザー)

11月24日(水) こどもの心・親の心 鶴浜雅昭氏  
～児童相談所からの報告～ (県立中央児童相談所 心理判定員)

12月1日(水) 祈りの風景 岩井信子氏  
～土佐の正月行事～ (民俗・作法研究家)

■会場 市民フロア(デントタワー・ミナルビル5階、85・23393) 駐車場はありません

■時間 午後6時30分～8時30分

■定員 各回40人(定員になり次第締切)

■受講料 各回400円(資料代を含む)

■申し込み先 高知市文化振興事業団

\*電話かハガキ(住所・氏名・電話番号、受講希望日を明記)で、事業団まで。  
\*受講料は当日受け付けます。  
\*欠席の場合は、事前連絡をお願いします。